

---

# 愛、ヲ、クダサイ

久芳

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

愛、ヲ、クダサイ

### 【Nコード】

N5917E

### 【作者名】

久芳

### 【あらすじ】

今から、一月ほど前。あたしのピエロのぬいぐるみが、突然動き出すようになった。愛してください。愛をください。どんなに逃げても、ピエロは追ってくる。あたしはピエロから、逃げる事ができない。

## 1話

愛、を、ください。

愛、を、ください。

あなた、の、ため、なら。

なんでも、する、から。

愛、を、ください。

愛、を、ください。

「な、んで……」

あたしは、それ、を見た瞬間、思わず立ち止まってしまった。

後ろを歩いていた男子生徒が、あたしにぶつかり、怪訝そうな顔でこちらを振り返っていく。

けれどあたしは、一步も動くことができず、ただ、目の前の道路を見つめていた。

愛、を、ください。

校門を出てすぐの、下校中の生徒がたくさん歩く通学路。車がひっきりなしに行き来する道路に、それ、はいた。

手のひらに乗るサイズの、キーホルダーにしては大きい、頭にヒモがついたぬいぐるみ。フェルトでできたまるい顔に、白い毛糸の髪。黄色い星と赤い涙を描かれた顔に、紫色の服とつながり帽子。

愛らしいピエロが、頭上を車が通り過ぎていくのも気にせず、はいつくばりながらこちらを見ていた。

愛をください。愛してください。ただペイントされただけの口なのに、こんな距離では聞こえるわけがないのに、ピエロがそう、あたしに言ってくる。愛してください。愛してください。なんでもする

から、愛してください。

「やめて……どうして……」

動けるわけ、ないのに。

こうしていつもあたしを追い回すから、捨てたのに、戻ってきて何回捨てても、戻ってきて。だから、ダンボールにガムテープを巻いて、ベッドの下にしまいこんだはずなのに。

ピエロは二頭身の身体を重そうに引きずって、あたしだけを見て向かってくる。中身はただの綿だから歩くことはできなくて、身体を泥だらけにして向かってくる。

可愛くて買って、ずっとスクールバッグにつけていたものだけど、今はもう恐怖しか感じない。

愛してください。愛してください。

泥だらけの頬をアスファルトに擦り付けて、ピエロがあたしを見る。目が合うと、口元がピクリとひきつる。どうやら、嬉しくてさらに笑ったらしい。

「……筒井さん？」

ふいに、背後から声をかけられた。

硬直するあたしに声をかけたその人は、凍りついたあたしの表情と道路のピエロを見ると、そう、と一人呟いた。

そして車が来ているにもかまわず道路におり、ピエロを拾い、また戻ってきた。

あごのラインにそろえて切った髪を風にそよがせて、彼女はズリ

落ちたスクールバッグをかけなおしながらピエロを差し出してくる。

「青野さん……」

「これ、筒井さんのでしょう？」

青野さんが、黒目がちな瞳で、こちらを見てくる。その瞳が、ピエロを受け取れといている。

「そうだけど……」

受け取らないでいると、彼女は無理やりあたしに握らせた。

青野さんの手の中では黙り込んでいたピエロが、また、愛してく

ださいと動き出す。あたしは取り落としそうになるけど、彼女の瞳がそれを許さなかった。

愛してください。何でもするから。言いながら、じたばたと手の中でもがくピエロ。それを静かに見つめ、彼女はあたしに言った。

「その子を、愛してあげてね」

そしてそのまま、去っていった。

「青野さん……」

あたしは引き止めることができなくて、ただ呆然と、その背中を見つめていた。

## 2話

ピエロが動き出したのは、一ヶ月ぐらい前のこと。夏休みがあけて、課題テストが終わったところだったと思う。

いつも持ち歩いているピエロが、突然、動き出した。

愛してください。愛してください。昼も夜も、あたしだけにしか聞こえない声でそれは訴えてくる。たまらず捨てても、いつの間にかバッグに戻っている。勝手にバッグから離れては、夜に枕元にあられる。

みんな、スクールバッグにキャラクターもののぬいぐるみやリボンなど目立つものをつける中、あたしはピエロだった。店でみつけて一目ぼれして買ったものだから、突然こんな風になってショックを受けた。

何かにとりつかれているとしか思えない。

家に帰って、ピエロをバッグと一緒にベッドの上に放り投げて、あたしはケータイのアドレス帳を開いた。

登録名は、『尋ちゃん』。一度も呼んだことのない、青野さんの名前だ。

青野さんは、このピエロのことがわかるんだ。あたしは、教えてもらってから一度もかけたことのない番号を呼び出した。

愛をください。愛をください。ピエロが、バッグの下敷きになって苦しそつにもがいている。愛をください、なんでもするから。

青野さんに訊こう。

あたしが通話ボタンを押そうとしたとき、ケータイが鳴った。

驚いて、思わずケータイを放り投げてしまう。最近ピエロのことで神経をすり減らしているから、ほんの些細なことでも、心臓が早

鐘を打つようになってしまっていた。

それでもあたしは名前を見て、すぐに出た。

「もしもし、浩二？」

『真悠、声震えてない？　なんかあった？』

うつん、なんでもない、とあたしは咳払いをする。ケータイを拾ったときのまま、絨毯に座り、ピエロを視界から消した。

「最近電話ばかりしてくるね、珍しい」

『なんだよ、メールのほうがいいのか？』

「そういうわけじゃないけど」

中学のときから付き合いはじめて、スポーツ推薦で地元から離れた高校に行った浩二とは、三年の遠距離恋愛が続いている。もうすぐ大会だというのに、彼は最近よく電話をしてきた。

『ただ声が聞きたくなっただけ』

「お盆に会ったばかりじゃない」

幸い、ピエロは電話がかかってきたとたんぴたりと動かなくなつた。ピエロが動いたりしゃべったりするのは他の人にはわからないようだけど、青野さんにはわかっていた。電話のむこうで愛をくださいと騒がれたら、浩二も驚くだろう。

彼はあたしの心配なんて知らずに、あっちの学校のことや部活のことを話している。その中には夏休みのときに聞いたものもあって、正直今は一刻も早く青野さんに相談したかった。

『……なんか、機嫌悪い？』

「えっ、全然」

苛立ちが伝わったのだろうか、あたしはあわてて声をつくる。

「生理中なだけ。気にしないで」

『そっか』

そっか、の声に、安堵が含まれているのをあたしは聞き逃さなかった。

お盆休みで帰ってきたとき、エッチの最中に起きたこと。浩二はそれを気にしていたのだろう。

『そっか……』

本人は悟られまいとしているようだけど、バレバレだ。それ以降、話す声がやたら明るい。四六時中、ゴムが破れたことばかり気にしていたのだろう。

「……じゃあ、切るね？」

『おう、機嫌悪いとこめんな』

大会頑張つてね。そう、どうも身の入りきらない応援をして、あたしは通話を切る。そしてすぐに、青野さんにかけた。

会話を終えた瞬間、ピエロが激しく暴れだした。恐くて、あたしは電話がつながるまで、身体を折ってうずくまっていた。

愛、を、ください。

愛して、くだ、さい。



### 3話

青野さんとは、同じクラスではない。

隣のクラスで、名前と顔は知っていたけど、お互い知っていたのは存在だけだった。

きっかけは、去年の冬休みの課題テスト明け。あたしは生理不順と生理痛の相談をしに、テストが終わって午後休みだったのを利用して、産婦人科にきていた。

評判がいいと聞いて行ってみたけど、そうでもなかった。いつもの女医さんが運悪くその日はいなくて、かわりにベテランの男性の医師だったけど、手練すぎて流れ作業のような診察をされて、正直不満だった。

基礎体温をつけて様子を見よう、と言われて、基礎体温表と痛み止めの薬を出された。診察室から出たら、あたしと同じブレザーを着た人を見つけたのだ。

『青野さん、だよね？』

あたしの呼びかけに応じた彼女は、同姓からも可愛いと評判だった。ゆるパーマをかけた長い髪に、ピンクのニットがよく似合って、テスト期間だからか化粧はほとんどしていないけどまつ毛も長くて短い丈のスカートからのぞく脚はとても細かった。持ち歩く小物も可愛い系で、濃紺のスクールバッグには、あたしのピアと同じシリースのくまのぬいぐるみがついていた。

彼女はあたしに気づくと、わきにおいていたバッグを抱えて、席をあげてくれた。待合室は混んでいるし、別に他に座る理由もなかったのも、あたしはありがとうと隣に座った。

胸にかかる髪を指に巻きながら、青野さんは『生理不順？』と訊いてきた。明るい声に、丸くて大きな瞳。あたしは素直にそうだと

うなずいた。

『なんか周期がばらばらで、生理じゃないときもお腹痛くなったりするからさ、念のためにつて。青野さんも？』

『私は、違うの』

首を振って、彼女はくまをなでる。そのしぐさが可愛くて、あたしは同姓ながら思わず頬が緩んだ。

『妊娠したの』

あっけらかんと、彼女は言った。

『だから、今度、堕ろすんだ』

あたしはぽかんと口を開けていた。それを見て、青野さんはくすりと笑った。

『まさかまさかとは思ってたけど、いい加減やばいかなと思って調べたら本当にあたってたね。だから、病院にきて、いろいろ相談したんだけど……』

あたしの口からかうじて出た言葉は、一人で来たの？ だった。あちこちであたしたちのように話をしている人たちがいるから、待合室は案外この話が響かなくて、制服を着たあたしたちをしげしげと見る人もそれほどいなかった。

『親と来たの。今、トイレ行ってるんだけど……泣いてるんじゃないかな。あたしが妊娠したって聞いて、そうとうショック受けてるもん』

彼女の声は、つとめて明るかった。妊娠して堕ろすなんて話なのに、全然気にも留めていないようだ。こんなに簡単にあたしに話すなんて、正直どうだろうと思ってしまふ。

『赤ちゃんってさ、三ヶ月だとけっこう大きいんだ。ケータイと同じぐらい。それを子宮に器具入れてバラバラにするんだって。もう、指とかもちやんとできてるのに』

思わず、口元が引きつった。この子、何でこんなことを平然と言うんだろ。できたら堕ろせばいいなんて簡単に思ってるのかな。

『ケータイぐらいの子供が、今、私のお腹にいるんだって。なんか、

あまり実感がないんだよね』

触ってみてよ、と、青野さんがあたしの手をとる。抵抗する間もなく、制服ごしに彼女のお腹に触れた。

『お腹もまだ、ぺったんこなのに……』

青野さんの声が、かすかに震えた。あたしの手をとる指先も、小刻みに震えていた。折り目の綺麗なプリーツごしに、彼女の体温を感じる。しつとりと、つかむ手が汗ばんでいた。

『……ね』

なにが、ね、なのだろう。あたしは自分でもよくわからない相づちをうつ。青野さんは、まったくすと笑って、かすかに鼻をすすった。

『彼は、このこと知ってるの？』

『知ってるよ』

『それで、堕ろすことになったの？』

『うん』

そう、としか言えない。あたしは青野さんが流す涙に、ただハンカチを差し出すしかなかった。

一瞬でも、妊娠を軽く考えてるなんて思ってたごめんね。そう、心の中であやまる。軽くなってるなんて考えるわけない。考えていたら、青野さんは涙なんて流さない。

あたしたちは互いに無言になり、お腹にあてた手もそのままだった。かける言葉も見つからず、青野さんもひっそりと泣いていて、沈黙が重かった。

あたしは診察を待っている間に、先に入った子のことを思い出した。違う高校の制服で、お母さんと一緒に来ていた。あの先生は心配りもせず大きな声でしゃべるものだから、彼女が処女だということも漏れた声でわかってしまった。

生理中じゃなくてもお腹が痛くて。あたしと似たような症状だ。じゃあ卵巣に水がたまってるのか調べるからと医師が言う。そして母親に、今はエコーで調べられるので、セックスの経験がなくても

大丈夫ですよ、中に器具入れたりしませんから。と説明していた。

あたしも青野さんも、そんな説明を受けることはなかったし、それはこれからもずっと言われないことだった。

## 4話

青野さんは電話に出なかった。

ピエロはあいかわらず、もがいている。ひび割れたような声で、あるいは悲鳴のような甲高い声で、あたしに向かって言い続ける。愛をください。愛してください。何でもするから愛してください。必死にバッグの下から出ようとしているのだろう、小さな腕が布団を叩く音が聞こえる。

「青野さん……」

あきらめられなくて、あたしはかけなおす。なにかをしていないと不安だった。ピエロが恐いのなら、逃げればいい。いつそ、焼いてしまえばいいのかもしれない。でも、なにをしても、ピエロはずっとあたしを追うような気がして、解決するしかないと思うのだ。

「青野さん、お願い……」

つながらない電話に、あたしは祈る。普段ろくに口をきかない相手なのに、こんなにもすがっている。でもあたしには他に、頼れる人がいなかった。

「お願い……」

病院での一件以来、彼女は変わった。

すこしずつだけど、雰囲気が変わったものになっていった。着ているセーターの色も、紺やグレーといった落ち着いた色になった。短いスカートはあいかわらずだけど、持ち歩いていた小物もシンプルなものに変わっていった。

綺麗に弧を描いていたまつ毛も、ピンクのアイシャドウも、グレイの落ち着いた色になって、化粧の仕方も変わった。誰かとつるむこともなくなり、一人で歩いているのをよく目にした。

その変化は早急なものではなく、徐々に徐々に、一日一箇所、す

ぐには気づかないようなところがかわっていった。すぐそれに気づいたあたしは、やはり青野さんの出来事を知っていたからだと思う。そしてあの豊かな髪をばっさり切ったときから、彼女の態度は一変した。いつも静かな瞳で、静かな口調で。あまり目立つこともなくなつた。

それでも不思議と、彼女が中絶したという話を耳にすることはなかった。学校の生徒が妊娠したという噂が流れるのは珍しいことじゃないし、実際あたしも何度か聞いていた。彼女の彼氏が大学生だというのもあったからだろうか。変わった変わったと注目されはしたけど、失恋したのかな、と囁かれた程度で、中絶したという話はまったくもってなかった。

彼女は今も変化の真っ最中で、シールをべたべた貼っていた教科書もまっさらになっている。除光液で落としたのか、それとも買い換えたのか。毎日会うクラスメイトより、時たま会う程度のあたしのほうが、その変化をひしひしと感じた。今の彼女の昔の名残といえば、やはりバッグにつけたくまのぬいぐるみぐらいだろうか。

何度も何度も、留守番サービスにつながってしまう。それでもあたしはかけなおす。

病院で涙した彼女と、ピエロを差し出してきた彼女。それは間違いないく同一人物なのに、別人のようだった。静かな瞳には、大切なものを失った、悲しみに満ちた黒い影が宿っていた。

「青野さん……」

出ない。どんなに掛けてみても、出ない。

あたしは一人、うなだれるしかなかった。

あいかわらずピエロは元気だ。困ってしまうぐらい元気だ。愛をください愛をください。お願いです、愛をください。

耳をふさいでいると、メールが一通。名前は浩二。タイトルは『ごめん』。

『さつき、変な電話してごめん。俺、真悠が妊娠したらどうしようって心配だったんだ。真悠のこと、傷つけたくなかったんだ』

返事をする気にはなれなかった。しばらく眺めて、あたしは待ち受け画面に戻した。

浩二はこうして、避妊に失敗したことを気にしていた。きつと部活も上の空だったんだと思う。もしあたしが妊娠してしまったら。きつと傷つけてしまう。そう思っていたのだ。

傷つけると思いつていうことはやっぱり、浩二も最終的には中絶させるつもりだったのだろう。

青野さんの彼氏はどうだったのか。青野さん自身はどう思ったのか。彼女のお母さんは、両親は、何を思ったのか。

あたしは彼女が、あたしの前でしか、涙を流していないように思えた。彼氏や親の前では決して泣かず、一人でひっそりと、涙を流す姿を容易に想像できる。

真悠のこと、傷つけたくなかったんだ。

浩二の言葉が、なぜだかあたしをいらだたせる。できたら墮ろすしかない。彼は密かに、そう決断していたのだ。

愛をください、愛をください。ピエロの声はかれることもなく、どんどん大きくなっていく。愛をください。愛をください。ひたすら愛を求めて、泥だらけであちこち擦り切れた身体で、愛をください愛をください。

## 5 話

青野さんは、自分に宿った子供を、どう思ったのか。あの涙は、何を思った涙なのか。

中絶。言葉にすればたった二文字。でもとても重いその言葉を決断した彼女が流した涙。産もうと思ったのか、産めないと思ったのか。

あたしたちはもう十八で、結婚もできるし働くこともできるのだから、子供を育てることだってできるだろう。でもあたしは専門学校を、青野さんは大学進学を希望していた。

これからのことを考えるのなら、やっぱり、産めないと思うかもしれない。

でも、それでも。

思考がめぐる。考えてしまう。彼女が何を思ったかなんて、本人でしかわからないのに、こうしてあれこれ考えてしまうなんて。でも、あたしは、彼女の涙を忘れることができない。

愛、を、ください。

背後で、ぼとり、と、鈍い音がした。

振り向くと、ピエロがいた。バッグの下から這い出したのだろう、身体が少しつぶれていた。

愛、を、ください。

あたしはもう逃げることもなく、ただそれを、呆然と見つめていた。

ピエロが、すこしずつ、こちらにむかってくる。ずる、ずる、と、身体を引きずる音が聞こえる。



愛、して、ください。

ピエロはどうして、こんなに愛を求めるのか。あたしはあなたが  
恐いのに。恐くて、愛せやしないのに。

愛、して、ください。

一瞬、だけでも、いいから。

愛、して、ください。

「どうして……」

あたしは、ピエロに手を伸ばした。  
のばさずにいられなかった。

どうして、こんなに、愛を求めるんだろう。

この、醜い、身体を。

愛して、ください。

一度だけ。

一瞬で、いいから。

「どうして……」

泥のついた三角帽に、そっと触れる。それだけで、ピエロは前進  
を止めた。そしてあたしの指に、赤い涙がかすれた頬を、すりよせ  
てくる。

愛、を、ください。

頭を撫でると、嬉しそうに身体をゆらした。

あたしはそっと、ピエロを抱きかかえる。ピエロが、お腹に顔を  
うずめてくる。あたしはただ、頭を撫で続けた。

愛をください。愛をください。愛をください。ピエロが、あたしに囁く。

ケータイが鳴り、相手を見る。

青野さんだった。

『ごめんなさい、塾だったの』

静かな声だった。でもその響きの中に、心配という感情もこめられていたのをあたしは感じ取った。

「あの、青野さん……」

これから、会える？

そう切り出したあたしの腕の中で、ピエロがまた、愛をくださいと呟いた。

## 6話

「……ごめんね、呼び出しちゃって」

「いいの、もう帰るだけだったから」

待ち合わせは近所の公園にした。青野さんがわざわざ、あたしの家の近くまで来てくれたのだ。

私服に着替えたあたしに対し、青野さんは制服のまま。とりあえず座ろうかとベンチに座った。

こうして隣に座るのは、病院以来だ。

「ピエロのぬいぐるみのことなんだけど……」

あたしは早々と切り出した。空はもう、夕焼けとともに薄闇が広がりはじめている。ためらっていたら日が落ちて、言えないまま終わってしまいそうだった。

「ちゃんと、愛してあげた？」

青野さんは、そう言いながら、あたしの手の中にあるピエロの頬をつついた。しゃべりこしないものの、ピエロもくすぐったそうに身をよじらせている。ピエロが動いているということに、あたしはもう、嫌悪を感じなかった。

「愛してあげてね。私は、できなかったから……」

そう呟く青野さんの横顔は、夕日に照らされて深く影をつくっている。伏せられたまつげが、小刻みに震えていた。

「青野さんのところにも、来たんだよね」

「うん。でも、愛せなかった」

気づくのが遅くて、去っていった。彼女は、そう呟く。消え入りそうな小さな声で、遅かったのと、自分自身に言い聞かせている。だからあたしは、ピエロを手渡した。

「人形ごと、あげるから。だから、愛してあげて？」

渡されて、青野さんは伏せていた目を見開く。何か言おうと口を開くから、あたしはそれをさえぎった。

「この子、青野さんの子供なんだよね？」

中絶して、もう身体はないけれど、魂だけは残っている。その魂が、このぬいぐるみに乗り移ったと考えれば、納得がいくし、もう、そうとしか思えない。

愛をくださいと、得られなかった愛を求めて、母を求めて。

青野さんの子供が、このピエロに、乗り移って。

お腹のところに満たされなかった愛を求めて、あたしに訴えてきた。  
「そうでしょう？」

「違う」

あまりにもきつぱりとした否定に、あたしはとっさに何も言うことができなかった。

「違うわ、違う。私の子じゃない」

「でも……」

食い下がるあたしに、彼女は首を振る。違う、違うわ。そう呟きながら、静かな瞳であたしを見た。

「あたしの子は、この子」

そう、彼女はバッグに手をやる。そこにぶら下がっているくまのぬいぐるみを指す。ピエロのようにには動かない、ただ重力に従っているだけのくまを、青野さんは大事そうに撫でた。

「このくまも、ピエロみたいに、動いたの。気持ち悪くてずっと無視してたけど、墮ろしたら、うんともすんとも言わなくなったの」

わかる？ と瞳で問われて、あたしは何も言えなくなる。  
嘘ではない。

こんなこと、嘘にしているわけがない。

「墮ろされるのわかってたから、この子、頑張って愛してもらおうとした。せめてお腹にいる間だけはって、ずっとずっと、愛をくださいって」

口調も、ただ静かで。あたしはピエロを返されて、受け取るしかなかった。

「私は気づくのが遅かった」

でもね、と、彼女は立ち上がる。太陽を背にして、逆光で黒くなった姿であたしに言った。

「でも、筒井さんはわかってるんでしょう？」

手を差し出されて、あたしは立ち上がる。そして背を押されて、歩き出した。

後ろで青野さんが、声をかけてくる。

「愛してあげて。どんな結果になっても、今は愛してあげて」

あたしは振り返らず、歩き出す。思わずかけだしそうになって、ダメだと思って歩調を戻す。ピエロを両手に握り締め、ただひたすら、歩く。

生理なんて来ていない。

あたしは浩二に嘘をついた。

これ以上彼に心配をかけてはいけないと思ったから。大会が近いのだから、部活に集中してもらいたかったから。

あたしは生理不順だから、体温の変化も、そのせいだと思ってごまかした。事実を知るのが恐くて、何とか自分に都合のいい言い訳をしていた。

でも、青野さんに言われたら、もう逃げることはできない。

くまを撫でる青野さんは、とても愛おしそうな表情をしていた。

あたしはピエロに、あんな顔してあげていない。

もう逃げられない。言い訳もできない。ピエロからも、青野さんからも。

そして自分からも、逃げられない。

あたしはただひたすら、歩く。薬局に行かなきゃ。お金はあったかな。

妊娠検査薬、買わなきゃ。

ピエロが、ささやく。

愛、を、ください。

END

## 7話

「……ごめんね、呼び出しちゃって」

「いいの、もう帰るだけだったから」

待ち合わせは近所の公園にした。青野さんがわざわざ、あたしの家の近くまで来てくれたのだ。

私服に着替えたあたしに対し、青野さんは制服のまま。とりあえず座ろうかとベンチに座った。

こうして隣に座るのは、病院以来だ。

「ピエロのぬいぐるみのことなんだけど……」

あたしは早々と切り出した。空はもう、夕焼けとともに薄闇が広がりはじめている。ためらっていたら日が落ちて、言えないまま終わってしまったそうだった。

「ちゃんと、愛してあげた？」

青野さんは、そう言いながら、あたしの手の中にあるピエロの頬をつついた。しゃべりこそしないものの、ピエロもくすぐったそうに身をよじらせている。ピエロが動いているということに、あたしはもう、嫌悪を感じなかった。

「愛してあげてね。私は、できなかったから……」

そう呟く青野さんの横顔は、夕日に照らされて深く影をつくっている。伏せられたまつげが、小刻みに震えていた。

「青野さんのところにも、来たんだよね」

「うん。でも、愛せなかった」

気づくのが遅くて、去っていった。彼女は、そう呟く。消え入りそうな小さな声で、遅かったのと、自分自身に言い聞かせている。だからあたしは、ピエロを手渡した。

「人形ごと、あげるから。だから、愛してあげて？」

渡されて、青野さんは伏せていた目を見開く。何か言おうと口を開くから、あたしはそれをさえぎった。

「この子、青野さんの子供なんだよね？」

中絶して、もう身体はないけれど、魂だけは残っている。その魂が、このぬいぐるみに乗り移ったと考えれば、納得がいくし、もう、そうとは思えない。

愛をくださいと、得られなかった愛を求めて、母を求めて。

青野さんの子供が、このピエロに、乗り移って。

お腹のところに満たされなかった愛を求めて、あたしに訴えてきた。  
「そうでしょう？」

「 違う」

あまりにもきつぱりとした否定に、あたしはとっさに何も言うことができなかった。

「違うわ、違う。私の子じゃない」

「でも……」

食い下がるあたしに、彼女は首を振る。違う、違うわ。そう呟きながら、静かな瞳であたしを見た。

「あたしの子は、この子」

そう、彼女はバッグに手をやる。そこにぶら下がっているくまのぬいぐるみを指す。ピエロのようにには動かない、ただ重力に従っているだけのくまを、青野さんは大事そうに撫でた。

「このくまも、ピエロみたいに、動いたの。気持ち悪くてずっと無視してたけど、墮ろしたら、うんともすんとも言わなくなったの」

わかる？ と瞳で問われて、あたしは何も言えなくなる。

嘘ではない。

こんなこと、嘘にしているわけがない。

「墮ろされるのわかってたから、この子、頑張つて愛してもらおうとしてた。せめてお腹にいる間だけはって、ずっとずっと、愛をくださいって」

口調も、ただ静かで。あたしはピエロを返されて、受け取るしか



なかった。

「私は気づくのが遅かった」

でもね、と、彼女は立ち上がる。太陽を背にして、逆光で黒くなつた姿であたしに言った。

「でも、筒井さんはわかってるんでしょ？」

手を差し出されて、あたしは立ち上がる。そして背を押されて、歩き出した。

後ろで青野さんが、声をかけてくる。

「愛してあげて。どんな結果になっても、今は愛してあげて」

あたしは振り返らず、歩き出す。思わずかけだしそうになって、ダメだと思つて歩調を戻す。ピエロを両手に握り締め、ただひたすら、歩く。

生理なんて来ていない。

あたしは浩二に嘘をついた。

これ以上彼に心配をかけてはいけないと思つたから。大会が近いのだから、部活に集中してもらいたかつたから。

あたしは生理不順だから、体温の変化も、そのせいだと思つてごまかした。事実を知るのが恐くて、何とか自分に都合のいい言い訳をしていた。

でも、青野さんに言われたら、もう逃げることはできない。

くまを撫でる青野さんは、とても愛おしそうな表情をしていた。

あたしはピエロに、あんな顔してあげていない。

もう逃げられない。言い訳もできない。ピエロからも、青野さんからも。

そして自分からも、逃げられない。

あたしはただひたすら、歩く。薬局に行かなきゃ。お金はあつたかな。

妊娠検査薬、買わなきゃ。

ピエロが、ささやく。

愛をください。

END

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5917e/>

---

愛、ヲ、クダサイ

2010年10月8日15時38分発行